京都大学言語学懇話会
１９９３年度活動報告

第３１回例会

１９９３年４月１０日（土）　午後１：３０～４：４５

京大会館１０２号室

研究発表

「中国語と日本語の受動文の構造について

— 統語レベルの受動文と語彙レベルの受動文 — 」

沈　　力（Ｄ３）

「人称の機能類型論 — 中米の諸言語を中心に — 」

八杉　佳穂（国立民族学博物館）

第３２回例会

１９９３年７月１７日（土）　午後１：３０～４：４５

京大会館２１１号室

研究発表

「現代口語ビルマ語の４つの補文形式」　澤田　英夫（研修員）

「古プロシア語 — 最近の研究から — 」　井上　幸和（神戸市外国語大学）

第９回大会（第３３回例会）

１９９３年１２月１１日（土）　午前１１：００～午後５：００

京大会館１０２号室

研究発表

「２つの事態認知スキーマモデルについて」　定延　利之（神戸大学）

「土族語はどのように記述されてきたか」　角道　正佳（大阪外国語大学）

「日本語の複合動詞後項の意味の拡張について」

今井　　忍（Ｄ１）＊

「現代日本語の「が／の交替」とモダリティとの関わりについて」

島　　千尋（Ｄ１）＊

「主題を表す助詞「って」」　丹羽　哲也（大阪市立大学）

「日本語における使役表現と受身表現の“接近”について」

早津恵美子（東京外国語大学）

＊本誌掲載の同著者による論文を参照。

中国語と日本語の受動文の構造について
― 統語レベルの受動文と語彙レベルの受動文 ―

沈　力

日本語の受動文においてはニ格名詞句が現れなければならないものと、現れてはならないものと、また現れても現れてなくてもよいものがある。また、中国語の受動文には、日本語のニ格名詞句に相当する「被」に後続する名詞句において同様の現象が見られる。本発表ではこの現象を説明するのに(1)を提案する。

(1)　中国語と日本語には２種類の受動文がある。
　a.「被／られ」が主要動詞となる受動文
　b.「被-V/V-られ」複合動詞が主要動詞となる受動文

(1)の提案で上の現象を説明すれば、ニ格名詞句(「被」に後続する名詞句)が現れる場合の受動文は(1a)タイプであり、現れない場合の受動文は(1b)タイプであるということである。本発表では、三つのポイントを踏まえて議論した。

第一に、「被」と「られ」は受動文の主要動詞である。この観察は三つの現象によって支持される。一つは中国語でも日本語でも受動文の主語名詞句は「被／られ」の項であるということである。もう一つは中国語では「被」の意味素性が文全体のアスペクチュアルな意味を決める。最後に、受動動詞の「られ」は「*褒められ-られ」のように受動動詞に後続できないが、「生まれ-られ」のように派生接辞の「られ」に後続できるという点から、派生接辞ではないと言える。

第二に、「被／られ」は語彙レベルで他の動詞と複合することが可能である。この観察は以下の二つの現象から得られる。一つは、中国語の複合語は品詞転換を起すが、句では品詞転換が起こらないという違いに基づく。「被V」では品詞転換が起こり、「被NP V」や「被NP V NP」や「被 V NP」などでは品詞転換が起こらないという現象は前者が複合していることを示す。もう一つは、日本語の関係節では主語のノ格化現象が見られるが、ノ格化の条件は関係節の述語が１項動詞に限るということである。「V-られ」が関係節の述語になる場合、ノ格化が起こるが、「NPにV-られ」や「NPを V-られ」や「NPに NPを V-られ」が関係節の述語になる場合、ノ格化が起こらない。これは「V-られ」が語彙レベルで複合して１項動詞になっていることを意味する。

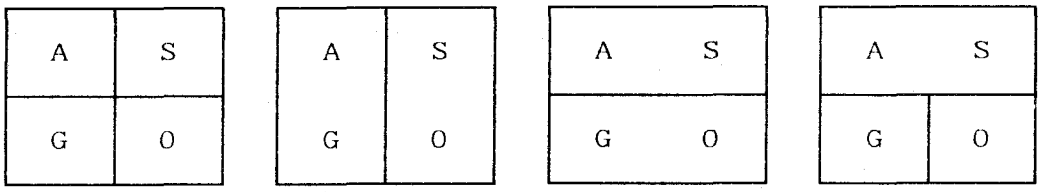
さらに、本発表の(1)の提案は、日本語の受動文と中国語の受動文は、語順の差を除けば、構造上、全く同じであることを示す。

「人称の機能類型論ー中米諸語を中心に」

八杉　佳穂

いわゆる自動詞の主語（Ｓ）と他動詞の主語（Ａ）、目的語（Ｏ）のどれとどれが形態的、統語的に同一の取り扱いを受けるかという観点から、対格言語とか能格言語などの類型分類が行なわれてきた。中米諸語では、Ｓ、Ａ、Ｏはふつう相互照応の人称代名詞（接辞／接語）で表わされる。能格言語として有名になったマヤ諸語では、それらを表わすのに、２つの人称接辞（接語）の組がある。一つはergativeと呼ばれる人代Ａであり、もう一つはabsolutiveと呼ばれる人代Ｂである。人代Ａは他動詞の主語を表わすのに対し、人代Ｂは自動詞の主語と他動詞の目的語を表わす。ところが、人代Ａは所有人称（Ｇ）としても機能する。所有人称と他動詞の主語が同じ形で表わされるのである。そのため、Ａ、Ｓ、Ｏの関係は、所有機能を取り込んで考察する必要があるのではないかと考えてみた。

ＡとＯはふつう同じ扱いを受けない。ＡとＧ、ＡとＳは同じ扱いを受けることがある。この経験的事実からＡ、Ｏを対角線上に配し、Ａ、Ｇ、Ｓを平行に配した四角（１）を思いついた。こうすることで、それぞれの関係はうまく表わせる。すなわち、たとえばＡとＧであれば、その境界線を取り除くことで、同じ扱いを受けることが表わせるが、ＡとＯは境界線を取り除いて結びつけることができない。



（１）　（２）　（３）　（４）

マヤ諸語の４つの関係をこの四角形に適用すると、（２）のようになる。メキシコ北部で話されている北テペワン語の１、２人称では（３）のごとく描かれる。この四角形は、中米の人称代名詞の形態的、統語的な分析から導かれたものであるが、人称代名詞ばかりでなく、日本語のような格をもつ言語などにも適用できる。日本語の対格型は（４）のようになる。

この四角形から次のような含意法則が得られる。もしＡとＯが同じ扱いを受けるなら、ＳまたはＧも同じ扱いを受けるか、Ｓ、Ｇとも同じ扱いを受ける。同様に、ＳとＧはふつう同じ扱いを受けない。すなわち、自然類を形成しない。しかしＳとＧが同じ扱いを受けるなら、ＡまたはＯも同じ扱いを受けるか、Ａ、Ｏとも同じ扱いを受ける。

Ａ、Ｓ、Ｏは動詞に関係し、Ｇは名詞に関係するので、一緒に論じるという考えはこれまで行なわれてこなかった。しかし上でみたように、Ｇというのは、Ａ、Ｓ、Ｏに関係する。Ｇを検討に加えることで、ＡやＳの発生や意味を考え直せるのではなかろうか。

（やすぎよしほ　国立民族学博物館）

現代口語ビルマ語の４つの補文形式

澤田　英夫

本発表の目的は、現代口語ビルマ語に見られる以下の４つの補文形式がどのような特徴を担っているかを明らかにすることである。

引用文(QS)	動詞句-文標識(-疑問の文修飾素)-引用標識	「…と」
名詞節(NC)	動詞句-名詞節標識	「…こと」
-phou.節(PC)	動詞句-phou.	「…するよう」
名詞化引用文(NQS)	動詞句-文標識(-疑問の文修飾素)　shou_^ta_	「…ということ」

最初に、ＮＣとＱＳの対立を考える。ＮＣとＱＳの両方を同時に取る wi_phan_-「批評する」などの動詞において、ＮＣは解釈を与えられる対象を表し、ＱＳはその対象に対して与えられた解釈内容を表す。両方同時には取れないが、単独ならＮＣ・ＱＳのどちらも取れる動詞のうち、①sin:za:-「考える」などでは、動詞連続Ｖ-nei_-「Ｖしている」が進行相・結果相どちらの解釈をとるかによって、ＮＣが思考の題材を表し、ＱＳが思考によって得られた見解を表すことがわかる。② pyo:-「話す」・youn_-「信じる」などでは、ＮＣとＱＳの文中で果たす役割は同じだが、ＮＣの内容が話者によって前提されるのに対し、ＱＳの内容は前提されない。③内在的否定の意味を持つ動詞nyin:-「否定する」・matxin_ga_ phyi'-「疑う(doubt)」では、ＮＣの内容が内在的否定のスコープに入るのに対し、ＱＳの内容は入らない。以上の事から、ＮＣは主文動詞の表す事象に「先立って与えられた」内容を表し、ＱＳは主文の主語によって「作り出された」主張内容を表すと言える。このことは、ＮＣ・ＱＳのどちらか一方しか取らない動詞の場合にもあてはまる。

次に、ＰＣの特徴について考える。ＰＣの表す意味は、非現実法のＮＣのそれと類似する。つまりＰＣは、主文動詞の表す事象が起こる時点でまだ起こっていない「先立って与えられた」事象を表す。しかし、ＰＣではさらに、その表す内容の実現が、文に現れる人間か話者によって期待されるかあるいは必要とされる、という意味が付加される。 khain:-「命じる」など命令法のＱＳを取る動詞はおおむねＰＣを取れるが、上に示したようなＰＣの意味的特徴からみれば不思議ではない。

最後に、ＮＱＳについて若干記す。ＮＱＳの意味的特徴はＮＣとおおむね同じであり、ほとんどの場合ＮＣの代りに用いることができる。ただ、動詞shou_-「言う」を含むことから明らかなように、この補文の内容は言語的コミュニケーションによって得られたものである。ci.-「見る」など視覚の動詞の補文となれないことがこの証拠となる。また文標識を持たない名詞文や疑似分裂文はＮＣを持たないので、ＮＣを要求する環境にこれらの構文が現れる場合には、ＮＱＳを用いるしかない。

（さわだ　ひでお、研修員）

古プロシア語　－最近の研究から－

井上　幸和

報告者は、最近、古プロシア語の最主要テキストである「第３カテキズム（エンキリディオン）」を言語資料として、語形式の『標準化辞典』（『古プロシア語の標準化』第一巻、1992，神戸市外国語大学研究叢書第22巻）を著した。今回の報告では、これに続く「テキストの標準化」と「文法（形態論）の標準化」に向けての作業の途中経過、および先に提出した古プロシア語の書記素論的研究（『古プロシア語 ENCHIRIDION 書記論』1982，『古プロシア語テキスト ENCHIRIDION の書記音素論的および音素論的研究』1984，神戸市外国語大学外国学研究第13巻，第15巻）との方法論上の連関について、紹介・解説をした。

報告中で十分に説明することが出来なかった、形態論の処理方法としての「パラダイム内標準化」と「パラダイム間標準化」について補足説明することで、報告要旨に代える。

資料⑧として配布したのは、当該テキスト中の出現頻度４以上の語形式に基づいて作成した名詞パラダイム用のデータである。一見して明らかなように、名詞パラダイム作成上、致命的な「虫食い（バグ）」がある。このバグを埋めるには、出現頻度４未満の語形式に頼らざるを得ないが、テキスト中の語形式は、出現頻度が減少するにつれて、不安定な形式（交替形式）が増大する（詳細については、上掲、井上，1982，1984 を参照）。そこで、語幹の形式に関しては同一パラダイム内で、変化語尾に関しては同一タイプのパラダイム間で、それぞれ、より安定した形態素の形式を確保しようとするのが、上記の２つの処理方法である。資料⑦に、テキストの一節に対する標準化処理のサンプルを示した。変化語尾形式の「パラダイム間標準化」については、別に、『標準化辞典』のデータを品詞別、変化タイプ別に再配列したものを参照することになる（資料中では省略した）。

提出される「テキストの標準化」と「文法（形態論）の標準化」は、同時進行の作業結果の２通りの表出であり、従って、「第３カテキズム」から引証される単語（語形）を、テキスト内とパラダイム内の両方の環境でチェックする目的で作成されるものである。

テキスト校訂としては Trautmann, 1910 と Mažiulis, 1981 が、また文法としては van Wijk, 1918, Endzelin, 1944, Schmalstieg, 1970, Klusis, 1989 等が提出されている現在の古プロシア語研究の状況にあって、報告者は、一連の研究において、「標準化」の処理原理のもとに、言語資料それ自体の有り様に即した収斂を目指している。

（いのうえとしかず・神戸市外国語大学）

2つの事態認知スキーマモデルについて

定延利之

認知言語学の展開に伴い，真理条件的意味を同じくする様々な事態表現どうしの微細な意味の差が事態認知の違いとして正面から追求され，事態認知スキーマの研究が本格的に始められるようになってきた．事態認知スキーマとは，人間の事態認知は決して無秩序ではなく，人間が当該事態を一定の枠(スキーマ)に当てはめる形でなされるという考えを受けた概念である．しかし事態認知スキーマに関する従来の研究は，言語の多様性に十分対処できるレベルには至っていない．発表者は，対照言語学の成果(特に池上(1981)の〈する〉的 vs.〈なる〉的)を取り込む形で，事態認知スキーマの豊饒化と普遍化を目指してきた．即ち，①モノからモノへのエネルギー推移を捉えるビリヤードボールモデル(CroftやLangacker等)だけでなく，モノによらない，状態から状態へのエネルギー推移を捉えるカビ生えモデルをも認めるべきであること，②両モデルは全く異質なものではなく，共にフレームカットアウト(田窪行則氏発案)という事態認知に由来すること，③両モデルの優劣関係は基本的に他動性の認知と関わること，等を主張してきた．使役形態素や対称性に関わる現象は当会でも既に発表済みなので，今回は頻度表現，回数表現に関わる現象(例えば下の(1)(2))を扱い，上の主張を補強した．

（１）＆声のやたら大きい人って，時々いるよね？

(1)は２つの解釈を持つ．１つは，声のやたら大きい人間が例えば17世紀に存在したが18世紀に絶滅し，19世紀にまた現れた等といった，文字通り存在の頻度を表す解釈で，これは我々の常識と合わないので顕在化しにくい．もう１つの解釈は，声のやたら大きい人間に我々が時々遭遇するという解釈で，これは英語文(Sometimes there are people who are too loud)にもあるが中国語文(有時候有声音很大的人)にはない．遭遇解釈は，声の大きい人間が話し手のパーソナルスペース内に存在している状態，存在していない状態の配列パターンを表すが，言語によってはパーソナルスペースという主観的スペースの状態が表しにくい，と考えられる．

（２）＆彼は心移りの激しい人でした．奥さんも，結局生涯で３回変わりました．

相当数の話者にとって，(2)は妻は延べ４人でもよいが寧ろ普通３人で，これは英語文(He changed wives three times)も同様だが中国語文(他一輩子换了三次愛人)は４人のみである．植木算の名で知られる算数の知識に反する解釈(３人解釈)は，計算や参照のために人間が値を一時的にとどめておく記憶箱の初期状態を考慮したもので，言語によっては記憶箱の状態が表しにくい，と考えられる．

（さだのぶ　としゆき，神戸大学）

主題を表す助詞「って」

丹羽哲也

助詞「って」は、「と」に相当する場合（あいつが犯人だって思っていた）、連体構造で「という」に相当する場合（山田って人が来た）、主題提示を表す場合（山田っておもしろい奴だね）などがある。ここでは、本来引用を表す形式である「って」が主題を表し得るようになった事情などを考察した。

名前の同定を表す、連体構造の「Ｘという／ってＹ」（ＸＹは名詞）は、その一つに、既知のＸの名前を改めて同定することでＸのことを改めて捉え直すという機能を持つ。これは「人間というものは、勤勉でもあるし怠惰でもある」のように、ア）Ｘがいかなるものであるか、その内実を捉え直す場合と、「あいつには節操ってものがない」のように、イ）Ｘが存在するか否か捉え直す場合がある。ア）は意味的に主題解説関係を含み込んでおり、かつここでＹは形式的なものでしかないので、「Ｘってものは」は「ものは」がない形でも、主題を表すようになり得たと考えられる。イ）の場合には、「最近の子は本って読まないね」のように、むしろ「というものを」に近く、主題を表すとは言いにくいものもある。「Ｘって」は、「あれって（ ?というのは）何かしら」と指示語に伴い得るように、「Ｘというのは」に比べ主題助詞として広く用いられるが、しかし「は」に比べれば制約が大きく、例えば、「音楽って何が好き？」に対して「音楽 ?って（は）バロックが好き」と、旧主題をそのまま繰り返すことはできず、「そうですねえ、音楽って（は）やっぱりバロックがいいですねえ」のように主題を改めて設定し直す必要がある、などの特徴が見られる。

主題を表す「Ｓって」（Ｓは文(断片)）には、「手術をするって何の手術なの」と先行談話からの引用を表す場合、「花子が結婚したって本当？」という伝聞の場合などがある。また「Ｓって」には「どう思う？――さあ――さあってにぶいなあ」のように、相手の発言が不適切だとして反駁し逆接関係を表すものがある。他方、「って」には「何だって？」のように、反問を表す用法がある。反問の中には相手の発言事情を問う場合（山田が犯人だって？どういうことだ）と、相手の発言に対して反発する場合（帰るって？まだ早いじゃないか）がある。前者は相手の発言部分「Ｓって」とその後の事情を表す文とが主題解説関係をなす。二文が一体化すれば、主題を表す「Ｓって」（の中の先行談話からの引用の場合）が成立する（山田が犯人だってどういうことだ）。また、後者も相手の発言部分と後続文が一体化すると、逆接的な「Ｓって」が成立することになる（帰るってまだ早いじゃないか）。

（にわてつや、大阪市立大学）

使役表現と受身表現の接近について

早津恵美子

日本語において、ある文脈の中で、使役動詞による表現と受身動詞による表現とがそれほど大きな違いを感じさせないことがある。いいかえれば、ある事態を叙述するのに、使役表現も受身表現も可能となるようなことがある。

○女にこんなことを［言わせる／言われる］ようになったらおしまいよ。

○その子をどうしてもブランコに乗せようと思い、引っぱりに行ってワーワー［泣かせて／泣かれて］しまった。

○重量感［を感じさせる／が感じられる］建物。

本発表では、このような現象を「使役と受身の接近」とよび、それが生じるのにはどのようなことが関わっているのか、また、個々の文脈においてなお使役・受身いずれかが用いられていることにはどういった要因が関わっているのか、といったことについて、拙稿「使役表現と受身表現の接近に関するおぼえがき」（1992『言語学研究』第11号）にもとづき、実際の用例の検討を中心に報告した。

まず、使役動詞による文・受身動詞による文を、構文的に ― ここでは、もとの動詞による文がどのような補語を要する文か、そして使役動詞・受身動詞による文の主語が、もとの動詞による文においてはどのような文要素にあたるか、という観点から ― 大きく五つの類に分類し、使役と受身の接近はこの各々の類についてみとめられるものの、《A》《E》の類においてその例が多いことを述べた。

《A》第三者が主語の使役・受身

《B》持ち主が主語の使役・受身

《C》相手が主語の使役・受身

《D》直接対象が主語の使役・受身

《E》使役と受身とで主語が異なるもの

次に、使役・受身いずれが用いられるかについて要因となりそうな事柄をいくつか列挙した。たとえば、当該の表現に先行または後行する部分からの影響（他動詞的な表現か自動詞的な表現かという影響、迷惑性・支配性・放任性など意味的な影響など）、個々の動詞の語彙的な意味やその文中での形、コロケーション、連体修飾節であるか否か、さらに、そこで表わされている事態に関っている人と人、人とコトガラなどとの関係およびその間の‘はたらきかけ性’や‘受け手性’などを発話者がどのように認識しているか、といったことが関わっていそうである。また、《E》類においては、事態を成り立たせている要素のうちいずれを主語として選択し叙述するかということも重要な要因となる。（はやつ　えみこ、東京外国語大学）